

J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第9番へ短調 BWV 795 —

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番ハ長調 BWV 772³⁾」から「第11番ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番イ長調 BWV 783」から「第15番ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番ハ長調 BWV 787」から「第8番へ長調 BWV 794」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第26号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたつて、「三声シンフォニア」の「第9番へ短調 BWV 795」を取り上げたものである。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「」に入れて表わす。

3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 9」は、35小節で構成された曲である。テーマは10回現れ、ストレッタはない。テーマと対旋律という構造ではなく、三つのテーマがいつも同時に現れる三重対位法で書かれている。「W.F.バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 9」にあたるのは、59番めの曲で「Fantasia 11」(BWV 795)と題されている。双方には、表 I に示したような違いが見られる。その違いの中に、異名同音が四箇所ある。

表 I 「Sinfonia 9」と「Fantasia 11」の相違箇所

Sinfonia 9	Fantasia 11
③ ⁵⁾ 下声2拍め F音 ⁶⁾ G音 As音上にスラーあり	③ 下声2拍め F音 G音 As音上にスラーなし
④ 下声2拍め D音 Es音 F音上にスラーなし	④ 下声2拍め D音 Es音 F音上にスラーあり
⑤ 下声1拍め 四分音符 C音	⑤ 下声1拍め 二分音符 C音
⑫ 上声1拍め 異名同音 A音	⑫ 上声1拍め 異名同音 Bes音
⑫ 下声4拍め 1オクターブの跳躍進行あり 八分音符 Es音 Es音	⑫ 下声4拍め 1オクターブの跳躍進行なし 四分音符 Es音
⑭ 下声1拍め 異名同音 E音	⑭ 下声1拍め 異名同音 Fes音
⑭ 中声4拍め タイによるシンコペーションあり 八分音符 Es音 D音	⑭ 中声4拍め シンコペーションなし 四分音符 D音
⑰ 下声1拍め 1オクターブ下 Des音 C音	⑰ 下声1拍め 1オクターブ上 Des音 C音
⑰ 下声3拍め 1オクターブ下 Es音 C音	⑰ 下声3拍め 1オクターブ上 Es音 C音
⑱ 下声1拍め 1オクターブ下 F音 Es音	⑱ 下声1拍め 1オクターブ上 F音 Es音
⑱ 下声2拍め D音 Es音 F音上にスラーなし	⑱ 下声2拍め D音 Es音 F音上にスラーあり
⑱ 上声4拍め タイによるシンコペーションあり 八分音符 C音 H音	⑱ 上声4拍め シンコペーションなし 四分音符 H音
⑳ 下声1拍め C音 C音	⑳ 下声1拍め C音 G音
㉕ 中声1拍め 異名同音 D音	㉕ 中声1拍め 異名同音 Eses音
㉗ 下声1拍め 異名同音 A音	㉗ 下声1拍め 異名同音 Bes音

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例、第4小節め→④、第3小節めから第10小節め→③~⑩。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変ロ音→B音、嬰ヘ音→Fis音。

楽 曲 分 析（譜 1⁷⁾ 参照）

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第 1 部	①～⑰ (17)	第 2 部	⑱～㉓ (18)
主 題	①～④ (4)	主 題	⑱～⑲ (2)
間奏 1	⑤～⑥ (2)	間奏 4	⑳～㉓ (4)
主 題	⑦～⑧ (2)	主 題	㉔～㉗ (4)
間奏 2	⑨～⑩ (2)	間奏 5	㉘～㉚ (3)
主 題	⑪～⑭ (4)	主 題	㉛～㉝ (5)
間奏 3	⑮～⑰ (3)		

各部分における楽曲分析

第 1 部

主 題

- ①～②・①～②上声部は、本来、後述する（T 2）が置かれる所であるが、全休符となっている。主題が 2 声で出現するのは、この箇所のみである。
- ・①～②中声部には、八分休符の後、短 3 度跳躍上行し短 2 度下行する八分音符三つからなる要素（a）二つと、八分休符の後、増 4 度跳躍上行し短 2 度上行する八分音符三つからなる要素（b）と、主音から音階に沿って順次下行し第 3 音に至る要素（c）の 3 種の要素からなるテーマ（T 1）がある。（c）前半の拍は、八分音符一つと十六分音符二つの組み合わせで、（c）後半の拍は、八分音符二つと四分音符、あるいは、八分音符三つとなっている。前半の拍の八分音符は、（b）の最後の八分音符とタイで結ばれ、シンコペーションとなっている。
- ・①～②下声部には、主音で 1 オクターブ跳躍上行後、半音階で主音から属音まで下行する要素（d）と、カデンツ（k）からなるテーマがある。このテーマは、下声部だけでなく、上声部にも中声部にも出現するが、2 小節分の 8 拍の内 6 拍は四分音符で、その四分音符の後には、（k）が続いており、いかにもバスの動きと言える特徴を持っている。そこで、筆者は、このテーマをバスターマと名付ける（T b）。（T b）の出だしの 2 拍は、転調の影響で、上行せず下行したり、跳躍音程の幅が変化することがある。また、（T b）が下声部以外に出現するときは、（k）を成す（T b）の最後の 2 拍は、八分音符・四分音符・八分音符の組み合わせによるシンコペーションとなり、リズムが変化する。それに伴って、カデンツの音形も変化する。
- ③～④・③～④上声部には、（T 1）がある。ここは、c moll に転調している。①～②の f moll に対する③～④の c moll は、属調関係である。

7) この小論における「Sinfonia 9」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sfonien」Urtext（Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972）を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

- ・③～④中声部には、(T b)がある。この(T b)の出だしは、3度跳躍上行となっている。また、この(T b)は、中声部に置かれているので、(k)は、シンコペーションとなっている。
- ・③下声部2拍めから、三種めのテーマ(T 2)が始まる。(T 2)は、八分休符の後(c)前半を反行させリズム的に凝縮した要素(♩ /), これも(a)を反行させリズム的に凝縮した要素(♩ /), 八分休符の後十六分音符四つで短3度と増2度跳躍下行し八分音符で短2度上行する要素(q')と(k)からなっている。(q')は、四つの十六分音符の一つめと四つめが増4度である。これは、(b)の反行形を変化させたものとする。これらの四つの要素が、(♩ /) (♩ /) (q') (♩ /) (k)と並んで、(T 2)となっている。

間奏1

- ⑤～⑥・⑤～⑥上声部は、(a)(b)(c)の断片を用いた装飾を加えながら、As音からオクターブ下のAs音まで半音階で下行している。ただし、B音とAs音間は全音で下行している。その間に、c mollからf mollに転調している。
- ・⑤～⑥中声部は、上声部の動きを5度下で、1拍遅れて5拍分追いかけている。6拍め以降は、リズム的な模倣はするものの上声部の忠実な模倣はせず、f mollへの転調を確実にするための動きをしている。
- ・⑤～⑥下声部は、休止している。

主題

- ⑦～⑧・⑦～⑧上声部には、(T b)がある。この(T b)の出だしは、6度跳躍上行となっている。また、この(T b)は、上声部に置かれているので、(k)は、シンコペーションとなっている。
- ・⑦～⑧中声部には、(T 2)がある。この(T 2)の(k)は、④下声部のそれとは違い、中声部らしくリズム的にも音形的にも変化している。
- ・⑦～⑧下声部には、(T 1)がある。①～②上声部同様、f mollで、(T 1)を奏でている。音高は、①～②上声部の(T 1)の1オクターブ下である。

間奏2

- ⑨～⑩・⑨～⑩上声部は、(b)の後半と(c)の前半のリズムを用いたシンコペーションに(d)の半音階の流れと四分音符のリズムを用いた動きを続け、(a)の動きの模倣を2回行って、次の主題に入っている。その間に、f mollからA durに転調している。
- ・⑨～⑩中声部は、上声部とは逆に、(a)の動きの模倣を2回行った後に、(b)の後半と(c)の前半のリズムを用いたシンコペーションに(d)の半音階の流れと四分音符のリズムを用いた動きを続けている。
- ・⑨～⑩下声部は、⑨では、上声部のシンコペーションを5度下で2拍遅れて追い、⑩では、中声部のシンコペーションを5度下で2拍遅れて追っている。そのシンコペーションの間を半音階の動きで繋いでいる。

主 題

- ⑪～⑫・⑪～⑫上声部には、As durで（T 2）がある。もし、①～②上声部に（T 2）が置かれていれば、f mollで、ここと同じかたちの（T 2）であったであろう。
- ・⑪～⑫中声部には、As durで（T 1）がある。この（T 1）は、①～②上声部の（T 1）と同じ形である。
 - ・①～②下声部には、As durで（T b）がある。（d）の出だしは、3度跳躍下行する形に変化して主音に入っているが、（k）は、②下声部と全く同じ形である。
- ⑬～⑭・⑬～⑭上声部には、（T 1）がある。ここは、Es durに転調している。この（T 1）は、③～④上声部と同じ形の（T 1）である。⑪～⑫のAs durに対し、⑬～⑭のEs durは、属調関係である。①～②のf mollに対する③～④のc mollも、属調関係である。
- ・⑬～⑭中声部には、Es durで（T b）がある。この（T b）も③～④中声部と同じ形である。
 - ・⑬～⑭下声部には、Es durで（T 2）がある。この（T 2）も③～④下声部と同じ形である。

間奏 3

- ⑮～⑰・⑮～⑰上声部は、（a）を用いた八分音符の動きを3回ゼクエンツした後、（a）をリズム的に拡大した動き（a×）を3回ゼクエンツしている。この間に、Es durから、c mollに転調している。
- ・⑮～⑰中声部は、⑮～⑰上声部とは逆に、（a×）を3回ゼクエンツした後に、（a）を用いた動きを3回ゼクエンツしている。
 - ・⑮～⑰下声部は、上声部・中声部のそれぞれの（a）の動きを、5度下で1拍遅れて追いかけている。⑰下声部は、3度上がるべき八分音符の動きを6度下げることによって、上声部・中声部と下声部の音域が広がり、ダイナミック性を増している。

第 2 部

主 題

- ⑱～⑲・⑱～⑲上声部には、c mollで（T b）がある。この（T b）は、③～④中声部の（T b）と同じ形である。音の高さも全く同じである。ただし、出だしは、5度跳躍下行して主音に入っている。
- ・⑱～⑲中声部には、c mollで（T 1）がある。この（T 1）は、③～④上声部の（T 1）と同じ形である。ただし、音の高さは、1オクターブ低い。
 - ・⑱～⑲下声部には、c mollで（T 2）がある。この（T 2）は、③～④下声部の（T 2）と同じ形である。ただし、音の高さは、中声部の（T 1）同様、1オクターブ低い。

間奏 4

- ⑳～㉑・㉑～㉒上声部は、⑨～⑩上声部と同じ動きを4度下で行っている。この間に、c

mollから、Es durに転調している。

- ・ 20～21中声部は、9～10下声部と同じ動きを5度上で行っている。
- ・ 20～21下声部は、9～10中声部と同じ動きを4度下で行っている。ただし、出だしは変化し、9度の跳躍上行をしている。
- 22～23・ 22～23上声部は、20～21上声部と同じ動きを2度下で行っている。この間に、Es durから、Des durに転調している。
- ・ 22～23中声部は、20～21中声部と同じ動きを2度下で行っている。
- ・ 22～23下声部は、20～21下声部と同じ動きを2度下で行っている。

主 題

- 24～25・ 24～25上声部には、Des durで(T b)がある。この(T b)は、7～8上声部の(T b)と同じ形である。ただし、出だしは、4度跳躍上行して主音に入り、八分音符が用いられリズム的にも少々変化している。
- ・ 24～25中声部には、Des durで(T 2)がある。この(T 2)は、7～8中声部の(T 2)と同じ形である。
- ・ 24～25下声部には、Des durで(T 1)がある。この(T 1)は、7～8下声部の(T 1)と同じ形である。
- 26～27・ 26～27上声部には、As durで(T 1)がある。この(T 1)は、3～4上声部の(T 1)と同じ形である。24～25のDes durに対し、26～27のAs durは、属調関係である。1～2と3～4、11～12と13～14と、同じ関係である。
- ・ 26～27中声部には、As durで(T b)がある。この(T b)は、3～4中声部の(T b)と同じ形である。ただし、出だしは、5度跳躍上行して主音に入っている。
- ・ 26～27下声部には、As durで(T 2)がある。この(T 2)は、3～4下声部の(T 2)と同じ形である。ただし、(q')は、1オクターブ上に上がらず、(e/)の最後の音と同じ高さから始まっている。(k)直前の(o/)から音域が1オクターブ上がっている。

間奏5

- 28～30・ 28～30上声部は、4度上で、15～17中声部と同じ動きをしている。ただし、出だしの音だけは、6度上である。この間に、As durから、f mollに転調している。
- ・ 28～30中声部は、5度下で、15～17上声部と同じ動きをしている。
- ・ 28～30下声部は、4度上で、15～17下声部と同じ動きをしている。

主 題

- 31～32・ 31～32上声部には、f mollで(T 1)がある。この(T 1)は、3～4上声部の(T 1)と同じ形である。
- ・ 31～32中声部には、f mollで(T b)がある。この(T b)は、3～4中声部の(T b)と同じ形である。ただし、出だしは、5度跳躍下行して主音に入っている。
- ・ 31～32下声部には、f mollで(T 2)がある。この(T 2)は、3～4下声部の(T 2)と同じ形である。ただし、3～4下声部とは違って、音域は最後まで上が

らない。(k)の最後も5度跳躍下行して主音に入っている。

主 題

- ③③～③⑤・③③～③⑤上声部には、f mollで(T 2)がある。①①～①②上声部の(T 2)と概ね同じ動きをしているが、③③と③④をまたぐ(9')だけ、音域が1オクターブ高くなっている。また、(k)が、少々変化している。何れも、曲を閉じるための変化とされる。
- ・③③～③⑤中声部には、f mollで(T 1)がある。①①～①②中声部の(T 1)と同じ動きをしている。最後はピカルディーの3度を響かせ、長和音で曲を閉じている。
 - ・③③～③⑤下声部には、f mollで(T b)がある。①①～①②下声部の(T b)と同じ動きであるが、(d)の出だしは、①～②下声部と同じように、F音を1オクターブ跳躍上行して、主音をしっかり響かせている。最後は、(T b)の原型の(k)にそってF音に納まり、曲を閉じている。

三つのテーマを上声部・中声部・下声部の何れに配するか、組み合わせは六通りあるが、そのうち二通りの組み合わせは、本曲には用いられていない。四通りの組み合わせの用い方は上記した。次の表Ⅱは、この四通りの組み合わせの用い方と調性をまとめたものである。

表Ⅱ テーマの組み合わせと調性

テーマの組み合わせ		出現する小節と調性			
上声部	T 2	①～② f moll 上声部は休止	①①～①② As dur	③③～③④ f moll	
中声部	T 1				
下声部	T b				
上声部	T 1	③～④ c moll	①③～①④ Es dur	②⑥～②⑦ As dur	③①～③② f moll
中声部	T b				
下声部	T 2				
上声部	T b	⑦～⑧ f moll	②④～②⑤ Des dur		
中声部	T 2				
下声部	T 1				
上声部	T b	①⑧～①⑨ c moll			
中声部	T 1				
下声部	T 2				

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表Ⅲのような指示をしている。

表Ⅲ 諸校訂版における「Sinfonia 9」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示	
Hans Bicshoff	Largo	♩ = 50
Ferruccio Busoni	Largo espressivo	
Alfredo Casella	Largo espressivo	
S.A.Durand	Malinconico poco Adagio	
James Friskin	Largo sostenuto	♩ = 40
Vilem Kurz	Largo, mesto ed espressivo	
Wm.Mason	Largo	
G.E.Moroni	Andante espressivo	♩ = 69
Bruno Mugellini	Largo; con profonda espressione	♩ = 50
Julius Rötgen	Largo, mesto ed espressivo	♩ = 52
井口基成	Largo espressivo	
千倉八郎	Largo	♩ = 46

また、内外10人の演奏時間は、表Ⅳのとおりである。

表Ⅳ 諸演奏家における「Sinfonia 9」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	3'27"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	4'41"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	4'17"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	5'08"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	3'22"
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	2'52"
田村 宏	不明	ピアノ	3'37"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	3'10"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	3'48"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	3'33"

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

表Ⅲの校訂版の指示に見るように、どの演奏もゆっくりしたテンポである。その中において、ニコラエヴァと高橋悠治は対照的な演奏をしている。ニコラエヴァは、高橋の2倍近い演奏時間であるが、装飾音は少ない。それに対し、高橋は、10人の演奏家の中では1番速いテンポであるにもかかわらず、非常に多くの装飾音を用いている。筆者は高橋の演奏に、小枝がからまる森に迷い込んだような感じを持った。

演奏時間が4分を越す演奏は、筆書の肺活量では息苦しく感じられるので、「Adagio ♩=40」というテンポをとりたい。

アーティキュレーション

表Ⅳにあげた演奏は、ほとんどレガート奏法であった。筆者も、全曲概ねレガートに奏す。区切りを感じたいところには、譜2に|を記した。

装飾音

「Sinfonia 9」（BWV 795）の原典版には、¹²上声部4拍めのみ装飾音がある。他にも装飾音を付けることは可能であるが、筆者は、装飾音による美しさよりも、本曲の持つ静謐さを愛でたい。¹²上声部4拍め以外には、³⁴上声部4拍めの導音につける。装飾音の奏法は、譜2に小音符で記した。

各部分における演奏解釈

- ①～②・悲劇的雰囲気のを漂わせながら、*P*で始める。
- ・中声部（T 1）の（a）の要素が出現するところは、（T 1）はもちろん間奏の部分も、二つめの音に向けて*cresc.*し、二つめから三つめの音に向けて*decresc.*する。
 - ・（b）は、タイで結ばれた八分音符を充分テヌートする。その音が、（T 1）のクライマックスとなる。従って、（b）はクライマックスに向かって*cresc.*し、その後は*decresc.*する。
 - ・下声部（T b）は、半音階の四分音符を丁寧にテヌートして響かせ、（k）は、納めるように、*decresc.*する。
- ③～④・上声部（T 1）が属調で現れているので、少し悲劇的要素が薄れ、*mP*となる。
- ・下声部に（a）の要素をつかった（T 2）が出現し、①～②よりも躍動感を加えた表現をし、救いの予感を与える。
- ⑤～⑥・間奏は、天から降りてくる優しい天使のささやきのような*P*で始める。
- ・上声部と中声部の掛け合いは、上声部の音の中声部の音が追いかけるように奏し、天から降って地上に声が近づくに従って、*cresc.*する。
- ⑦～⑧・ここは、*mf*にし、苦しみに耐えうるある種の逞しさを感じさせたい。
- ・上声部（T b）の半音階は、優しさを感じたい。
 - ・中声部（T 2）は、内声らしい慎ましさがほしい。
 - ・下声部（T 1）は、苦しいが一步一步確実な足取りで進んでいくような力強さがほしい。
- ⑨～⑩・この間奏も、優しい*P*で始める。
- ・上声部と中声部は、地上の祈りを天使が受けて答えているように掛け合う。
 - ・下声部は、上声部と中声部の掛け合いを深いところで見守っているように支える。
- ⑪～⑫・少し希望が見えてきたような長調の*mp*で始める。
- ・上声部（T 2）は、少々華やかさを加え、希望を表す。⑫4拍めに、装飾音を付す。
 - ・中声部（T 1）は、少々軽やかさを加える。
 - ・下声部（T b）は、落ち着いた半音階を響かせ、落ち着いた（k）でまとめる。
- ⑬～⑭・⑪～⑫の属調となり、希望が膨らんだ*mf*となる。
- ・上声部（T 1）は、希望に向かって元気さを増した音にする。
 - ・中声部（T b）は、少し主張するように音を豊かに出す。
 - ・下声部（T 2）は、遠慮せずに躍動感を出す。
- ⑮～⑰・希望に満ちた主題の後には、葛藤の間奏となる。（a）の要素が多用され、現実の厳しさの中での闘いとなる。この闘いは、*P*で始まり、*cresc.*して*f*に至る。
- ・（a）と（a×）が掛け合いと追いかけをしている。それがストレッチのような緊張感を生む。間奏の後半は、緊張が最高に達し、*poco agitato*となる。
- ⑱～⑲・厳しい*f*で始まる。

- ・上声部（T b）の半音階は、厳然と奏す。
 - ・中声部（T 1）は、頭は押さえられてるが、後半は上声部と高さが入れ替わるところに見られる抵抗する強さのようなものを出したい。
 - ・下声部（T 2）は、（T 2）としては、1番低い音域で奏している。心の苦しみが深いところでごめいているように響かせる。
- ⑳～㉓
- ・この間奏は、⑨～⑩の間奏と同じ要素でできているが、掛け合いが上声部と下声部となり、優しさよりもダイナミック性が増している。闘いと祈りのエネルギーが強くなっている。
 - ・㉒～㉓を *mf* とし、㉒～㉓を *mp* として、闘いが収束に向かっていることを表したい。
- ㉔～㉕
- ・闘いが終わった穏やかな長調の *P* で始める。
 - ・上声部（T b）は、威圧感のない静かな半音階とする。
 - ・中声部（T 2）は、少し慎ましやかにする。
 - ・下声部（T 1）は、静かに落ち着いた雰囲気を出す。
- ㉖～㉗
- ・㉔～㉕属調となる。*mf* で希望を確かめる。
 - ・上声部（T 1）は、希望の手応えを音に込める。
 - ・中声部（T b）は、穏やかな半音階の響きを出す。
 - ・下声部（T 1）は、上声部と共に音域が上がり、躍動感を加える。
- ㉘～㉚
- ・ここも、⑮～⑰同様の葛藤の間奏となっている。ここも *P* で始まり、*cresc.* して *f* に至るが、⑮～⑰ほどの激しさはない。
- ㉛～㉜
- ・厳しい *f* で始まるが、打ちのめされたうめきはなく、闘う覚悟と逞しさを持った *f* である。
 - ・上声部（T 1）は、悲劇の中にも凜とした強さを表したい。ここの（b）のクライマックスが、全曲最大のクライマックスとなる。
 - ・中声部（T b）は、誇りを持った殉教者の足取りのような半音階とする。
 - ・下声部（T 2）は、決意のようなものを感じさせる響きとしたい。
- ㉝～㉞
- ・最後の主題部分は、㉛～㉜と同じ *f moll* である。㉛～㉜で宣言したことを念を押すように高らかに歌い上げている。㉛～㉜に引き続き *f* で演奏し、*cresc.* でより強さを増し、㉝3拍めから、*dim.* しながら、少々テンポを落としてピカルディーの3度に入り、救いを感じて全曲を終える。
 - ・上声部（T 2）は、8度と9度の跳躍進行を含んで、リズム的動きに加えて音程的動きにもダイナミック性を加えている。それを音程感のある演奏で充分生かすようにする。㉝4拍めの導音に装飾音を付す。
 - ・中声部（T 1）は、どっしりした重みのある音を出す。
 - ・下声部（T b）は、落ち着きと幅のある響きで、上の二声を支える。

お わ り に

「Sinfonia 9」は、嘆きと闘いと救いの希望と凜とした諦観が感じられる曲である。殉教者の誇りのような気高さが漂う。なぜ、最後にピカルディーの3度なのか、この曲ほど、その意味が明解な曲は、少ないであろう。

参考文献・参考楽譜・参考CD

*参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（音楽之友社）
- ・山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（ムジカノーヴァ）

*参考楽譜

原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext（Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979）
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript（Dover Publications, Inc., New York 1978）
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext（Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972）
- ・J.S.BACH 「Inventionen Sinfonien」 Urtext（G. Henle Verlag, München 1978）
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext（C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933）
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext（Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973）
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂（カワイ出版 1983）
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編（音楽之友社 1965）

校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」 Hans Bischoff（Steingraber Verlag, Offenbach/M）
- ・BACH 「TWO-and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni（G.Schirmer, New York 1967）
- ・J.S.BACH 「Dreistimmige Inventionen」 Ferruccio Busoni（Breitkopf&Haltel Weisbaden）
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」 Alfredo Casella（Edizioni Curci Milano 1946）
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」 Durand S.A.（Editions Musicales, Paris 1957）
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」 James Friskin（J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970）
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmige Inventionen（Sinfonien）」 Alfred Kreutz（B.Schott's Sohnen Mainz 1950）
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TŘÍHLASÉ SINFONIE」 Vilem Kurz（Editio Supraphon, Praha 1981）
- ・BACH 「Three-Part Inventions」 WM.Mason（G.Schirmer Inc New York 1967）
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」 G.E.Moroni（Carisch S.p.a. Milano 1981）
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」 Bruno Mugellini（Ricordi 1983）
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen（Universal Edition, Hungary 1951）
- ・バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成（春秋社 1983）
- ・バッハ「インヴェンション」（音楽之友社 1955）
- ・バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編（全音楽譜出版社）
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・J.S.バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳（全音楽譜出版社 1972）

*参考CD

- ・Aldo Ciccolini（Piano）「J.S.BACH INVENTION」TOCE6601（TOSHIBA EMI）
- ・Christoph Eschenbach（Piano）1979「INVENTION & SINFONIA」F26G20323（POLYDOR）
- ・Glenn Gould（Piano）1989「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246（CBS SONY）
- ・Tatyana Nikolayeva（Piano）1986「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079（VICTOR）
- ・András Schiff（Piano）1985「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」FOOL-23100（POLYDOR）
- ・高橋悠治（Piano）1991「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967（NIPPON COLUMBIA）
- ・田村宏（Piano）1989「J.S.バッハ インヴェンション」CG-3722（NIPPON COLUMBIA）
- ・Kenneth Gilbert（Cembalo）1985「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113（ARCHIV）
- ・Gustav Leonhardt（Cembalo）1992「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863（BMG VICTOR）
- ・Helmut Walcha（Ammer-cembalo）1961「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231（TOSHIBA EMI）

譜1 「Sinfonia 9」 BWV 795 ①~⑮ (楽曲分析)

第1部
主題

①

短3° 半音 短3° 半音

T₁ 増4°

T₁

f:→c:

d Tb k

④

間奏1

c k a e/

c:→f: q' e/ k

⑦

主題

Tb

間奏2

d k c' p/

f: a a' a' a' a'

T₁ T₂ e/ k a'

⑩

主題

T₂

f:→As: c/ d Tb k

a' a' a' a' a'

T₁ T₂ e/ k a'

⑬

T₁

間奏3

a b c a a

As:→Es: Tb d k d/ d/

T₂ e/ k a'

譜2 「Sinfonia 9」 BWV 795 ①~③⑤ (演奏解釈)

①

T1のクライマックス

p *mp*

④

p

⑦

mf *p*

⑩

mp

⑬

mf *p* *cresc.*

16 *poco agitato* *f*

19 *mf*

22 *mp* *p*

25 *mf*

28 *p* *cresc.* *f*

32 *cresc.*

~~~~~ 少しテンポをゆるめて